

文藝誌

サ イ レ シ

創刊

小品文

遺稿

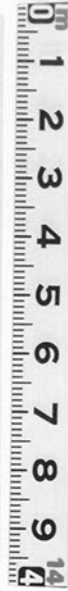
私と望遠鏡

松本純一

特殊編入

日誌抄

サ イ レ シ 社



死すべき汝は死に往け！ 苦しむべき汝は苦し
みに往け！ 人は幸福ならんがために生きては
ゐない。予が掟を履行せんがために生きてゐる
のだ。苦しめ。死ぬ。然し汝のなるべきものに
なれ——一個の人間に。

ジャン・クリストフ

目次	随想	暗	吾が生活より	あへて種拾ふ	敗れし者の手向	私上七百尺	雑詩	留置場ナンセンス
	感	俳句	自由詩	短歌				
	論	小説						
	屏							
特殊編入	ジャン・クリストフ	佐藤清長	永P、ロマンノフ	松本純一	岡部雄八	鈴木清敏	佐藤木郎	市川栄美
哀悼文	純一譜	蟬燥記	私と望遠鏡	遺稿	日誌	いろいろのこゝ		
	高瀬勝男	石川武夫	松本純一	同編	編輯子			

隨 想 感

佐 藤 清 長

嘗つて我が磐城の地には幾多の文藝誌が発刊されてゐた。そして夫の一つ／＼が單なる同人誌の交換にのみ終始してゐて有名無實の弊を蒙らざるものとはなかつた。然してそこに發生する地方誌の持つ矛盾が遺憾なくバクロされて『所謂その誌を通じての作品價值が多分なるハンディキャップを附せられて、交換條件の持つ特異性により、自誌禮讃の感念に支配され、他誌批評の恐怖を抱き意識的にその作品の分解を逃避してゐた』のである。さらば何故にかゝる地方誌の持つ矛盾が今日迄藏されてゐたのであらうかと云ふ問題について、私は茲に二つの見解を抱くのである。

一は同人誌の弊害——一は賣名的作品の發表——前者の持つ矛盾性はその統一さに端を發し、後者の持つ矛盾性は藝術のマスターベーションに依る結果であると思はれる。何故なれば、前者の持つ藝術の力は個人の意志／＼の集りである、故にその作品價值は常に100%の使命を果してゐる。譬ば十の作品全部が何等の批評なくその十人の人々に取つて100%の満足と與へてゐるのである。それはたゞひない問題である、併し號を経るに従つて其處に藝術的良心の發達を芽さなければならぬのは當然だ。同時に甲乙の意見が相違するものも必然であらねばならぬ、其處に同人誌の悩みがあり伏線する様々な蠢めきがあつて未發達の裡に終るのである。それはいつ解消することもなく、併して後者の誌としての存在は語る迄もなく單なる藝術の線光火花の如きもので、それこそ負傷のない病人である。私は敢て言ふ夫の何れの問題もが今日に及んで我々の前に展げ出されたことは、流り新しき藝術の啓蒙運動の爲めにはよき嗜咀でなければならぬと思ふ。

併うして今日迄に至つた磐城文藝の運動は唯單に磐城のみに止まつた極く小さな流れである。我々は今日迄の多元的な線から離陸して、清算された新しい文藝運動の火中に極めて嚴然たる態度の下に邁進すべきではあるまへか。明日の新しいことを信ずる自分は、亦明日の新しい偉大なる作品が生れることを信ずるのである。然りとはいひ何も三野混沌猪狩満直氏の如く精練された詩を草さなくともいい。生活の實際から生れた生きた詩乃至は創作が一番吾々の肺腑をさぐる言葉である故にだ何も生活から切り離しては出来得ない故にである。見よ今日我々は營利業者の手に依つて販賣される出版物の如何に階級的イデオロギーの含まれ居る物の大いなるかに、何を考へなければならぬであらうか。嘗つてはその壯麗な高塔にあつて吾々を魅惑して居つたブル文學が、没落せんとする冬の陽の如く荒々しくかたむくかを實際に見せしめられたことであらう。如何にそれは蔽ふても蔽ひきれざる現實の現はれであつたか。破壊される一つのものが没落の過程を辿りつゝある時其處には一つの新しいものが生れる爲めの芽生を以つて居る如く、我々がブル文學のあまりにも遠い理想の華やかに堪らない寂寥を覺えた時、我々の前には我々の生活を識る爲めの一つの手法が示されたのであるそれは單なる流行ではなかつた。なせなれば流行は一種の神經衰弱であるからである。具體的に云ふならばそれはブル文學に示される戀人同志の語らへに必要であるその一つ／＼の技巧に新しい衣を着けさせることの華やかな憂鬱だ、彼等は流行を追ふに抜け目がないからである。然らば我々の意識化されたブル文學の持つ力はなに、よるのであらうか、言はずともがなそこには何物もあり得ない。何故であら、我々には生活の餘裕がない、たゞそれだけの話である。故に餘裕のない生活が餘裕のある文藝に親しめる理由がないのである。我々は是の信念の下に學ぶべき生活の基本たる智識への獲得の爲めに純然たる理論と行動の一致に對して文學の持つ自由なる明日の約束を交さうではないか

暗 闇

P、ロマンノフ
永崎貢譯

..... 4

もう今日で三日人々は停車場に立ち續けてゐた。先方からの貨物列車は、どれもこれも兵士たちでギッシリだった。綿の入った長い外套にくるまつた老人と、片方の手を汚ない布片で細帯した若い一人の兵士とが一緒に駆け込んで来たが、列車は動き出してしまった。人々は二人を車から放り出して行つた。——おい！お願ひだから乗せて呉れ。おらはもう二日も待つてゐるのだから。二人は叫びながら追つた。肩に背負つた背囊は車と並んで動くのが見える。——馬鹿！駄目だよ。後から来るからそいつを待つてろ！人々は振り返つて怒鳴つた。羊の毛皮の外套に身を包んだ一人の兵士が、左右に開く戸口に身体を突張つて内部から戸を抑えて

ゐた。——あゝおらは不幸な男だよ。どうすればいいのだ。餓死しちやなんね。凍えてのたれ死んちやゐられねえ。老人が溜息を洩らした。そして背囊を降すと悲しげに列車を見送つてゐた。——首に十字架を懸けてゐない野獸も同様な人達だ。押し除けるように、赤い襟の着いた短かい外套にくるまつた百姓の婆さんが、小さな包を抱えてやつて来てつぶやいた。——惡魔があんな奴らを引連れて來やがつたのだ俺の怪我した手を又引裂きやがつた。俺の手は俺を悲しませることしか出来ないのだ。持つことも置くことも、使ふことも出來やしないのだ。兵士は怒りながら口でしつかりと汚れた細帯を結びなほした。長い外套の男が黙つて立つてゐた。そし

..... 5

て列車の方を見ては睨いた。あちらこちら、影を追ひ物乞ひでもする風な眼つきを見ると、動かなくなつてしまつた。婆さんは歎いてゐた。——何て荒々しい人々だらう。昔は随分と私の年老いた様子を見ると助けて呉れる人があつたのに、今は、胸を突いたり蹴り飛ばしたりする人ばかりだ。私は突き飛ばされてばかりゐる。——神さまも糞もあるもんぢやねえよ。一緒に番人のところへ行かうで。そこへ行つたら少しは温まるだろう。こんな停車場では凌ぎなんぞつかねわからね。老人はぶつ／＼云つた。二時間も経つと、遙か遠くの機関車がヒューヒューと汽笛を鳴らした。三人は外に出ると雪に埋もれた道を踏み進んだ。若い兵士が先づ列車の最後のところに一臺の空いた車を見付けた。レールを突走つて向ふ側に行つて飛上つた。後から老人がついて來て駆けながら背囊を投げ入れた。二人はやつと包を抱いた婆さ

んを兩手で扶け上げた。停車場からは多くさんの人々が押し寄せて來た。叫び、罵り、騒ぐ音。グサツと雪を踏む音。車の兩側をやけに叩く響きがこめて來た。——こゝはゆつ／＼してゐるぞ。兵士が怒鳴つた。老人は背中を小突いて注意した。——そんなに叫んちや駄目だ。さゝついたら皆んながやつて來るに決つてゐるでねえか。立上ると重い押し戸を閉めてしまつた。車の中は暗黒になつた。外にはたゞ譯もなく席を捜す人々の急いで往來する音のみがした。——有難い！あいつらはやつて來ないよ。兵士が言ふと、突然何物か車の腹に突き當つた。人々が外部から戸を開けようとしてゐるのだ。老人が怒鳴つた。——此處は入れねえよ丸太で一杯なのだからよ——おい開けて呉れ。三日もぶつ通し立ちつゞけなのだから、赤ン坊と二人きりだよ。——入れねえといふのに、わかんねえのか。おら

らは片附けてやつと這入れたんだから。

——俺たちが丸太を投げ出してやる！

外は静かになつた。列車は又動き出した。

婆さんは暗闇の中で十字を切つた。

——神さま、有難うございます。マリア様がお助け下されたのだ。私はあなたに祈を捧げます。

若い兵士は耳を車の腹のところにあてた。

——人々はすっかり凍れた制動機の上によち上つたのだよ。

——神さま、お助け下さいまし。こんなに多くさんの人間が今日外で凍え死ぬのでせうか。

外には物音がなかつた。赤ン坊のかすかなき聲だけがきこえて來た。……再び制動機のある所から物を叩いてゐる音がした。

——ごうか入れて呉れ。こゝで皆んな凍ひてゐるんだよ。早く、また列車が停まらねえうちに。

——若し又列車が停まればドットやつて來るだらうな。老人はつぶやいてゐる。そして外に叫んだ

——わかんねえのかよ！ おらはこゝに重なり合

つてゐるんだぞ。

——椅子の下でもいゝんだから、外から女の歎く聲がした。

——そんなに言つても駄目だよ。……眠^{シラ}として黙

つてゐよう。決して返事などしちやならねえ。

——お、神様、何といふ事です。列車が又停るなんて。皆んなが押し込んで私は潰されてしまひます。

やがて列車が停まつた。が別に人影はなかつた。

小さな停車場だつた。そしてまた、制動機を叩く音が始まつた。外の物音はすっかり寒さから解き放たれてゐた。

——入れてくれ、こゝに凍えてゐるんだよ。赤ン坊はもう手足を動かさなくなりやつた。

——未だ停つてゐる。老人が囁いた。

——何もしやべるな。さうすればあいつらも止めるだらうよ。

機關車は汽笛を鳴らした。そして列車は又走り出した。

我が生活より

二月三日

病床にて

節分三句

豆がらにいふされてねつ貳十四の春

ころがりてもさつてみたし豆のかす

いぢねひく年男見えて兄のこゑ
(太根)

これは長教松本純一君の私に贈られた句である君逝きて早半歳その悲しみの去來止まざる今日せめても
の手向けとして掲げこゝに君の靈をむかへむ

佐藤清長

——あん畜生め！ 人でなし！ くだばつちまへ！ 畜生！ 叫ぶ聲が止まなかつた。

婆さんは暗黒な車内に跪いてゐた。

——天に在します神さま。お助け下さいまし。マリア様人々をお救ひ下さいまし。お恵みを垂れ下さるように。外の寒さにごうして人々は赤ン坊と

一緒に震へてゐなければならぬのでせうか。

自由詩

喘ぎ

澤 新 八

悲しみを
哭く
暇もなく
生活の
筈に
せきたてられて
日々
機械のように
働く
勿論

前途の事など
何うなるものか
解らない

もの、種拾ふ

岡 部 雄 兒

今日もよく晴れたれば
渚に出で、なぐさみに
ものゝ種拾はむ
くるみ、椿、松かさなど
打上げられしものゝ哀しさよ
吸はれ、又打上げらる――
しづき浴び渚漁りて
今日もものゝ種ひろいば……
二月の日は、はや暮る――

敗者

鈴 木 伸

連命と言ふ大きな篩の中に
或る無數の混合物が投せられ
絶間なく篩はれて行く！
網の目の上に残りしものが幸福であり
篩ひ落された小破片が不幸なのだ
假令それは幸福の可能性が幾分なりあつたとして
運命は飽くまで篩の手を休めず
揉み砕かれた姿を不幸の中に
叩き落されて了ふのだ
破片！塵！
そうだ不幸なる者は社會の塵なのだ
社會の幸福者は不幸者を
塵か、でなければ犬か猫か思つてゐるのだ
虐げられ
酷使され

嘲けられつゝ、
それでも尙生きて行かねばならぬ
余りにも惨めな浅ましい
敗殘者の姿ではないか！

私しへの手向

佐 藤 清 長

廓寥として空漠たる空の色調
哀惜そこに求め得ずとはいへ
すでにして去る半生の生業
あゝ涯てしなく流れ渡る蒼空の唯中に
吾が心の悲しみをはいち送りて
ねむれる過去への手向けともせむ
あゝ一度は父を失ひ
一度は母と別れ
一度は戀を失ひ

一度は職を失ひ
あらゆる惨虐の筈を浴びつゝ
あらゆる人忍の重荷を背負ひ
行き暮れて悩み疲れし旅人の如く
歩み來れるつゞらなる道

人忍か？ 反逆か？

空の眞蒼さに込み透る運命の下層に
尙ふ厚い衣を着けさせられた私の身体は
はねかへる人間の意志に目覺め
重なり合つてゐる苦惱の扉を
吾れ自らに開く！

廓寥として空漠たる空の色調
哀惜そこに求め得ずとはいへ
すでにして去る半生の生業

あゝ涯しなく流れ渡る蒼空の唯中に
吾が心の悲しみをはなち送りて

ねむれる過去への手向けともせむ
それぞ吾れへの傷心に
新らしき萌芽を生み出す
悲しくも美しき前途への
約束である

地上七百尺

松 木 敏 郎

ヘンボンと飄る×旗
一九三〇年の年が流れやうとする
霜月の朝

萬上の喊聲と ぞよめきの杞憂は
地上
七百尺の間をホフクして

..... 今靜かに英雄の天下るを見守る

雑 詠

藤 田 榮 美

灯ついたが職も宿も見つからぬ俺の心は眞暗

停車場のベンチの固さ冷たさ貧しい者の旅のしこ
ね

雪洞の光で夜櫻を見る —— 俺はそんな戀をして
みたい

花の散るすぐ後から青葉がぐんぐん芽生いて行く
—— その力！

寒いのは薄着のせい北海道にさへぬくゝ暮してゐ
る人がある

夜業終へて火鉢に手をかざせば疲れた眼にしみる
消しのこりの炭火！

美しくいしかし月はひやゝかだ俺は灼熱の太陽を
欲してゐる

静 夜

市 川 迷 夢

米買はん金なき夜のさびしさをもの言はすゐて
寝るはかなしき

働らくに勤めなくして遊び居る父の姿の頼に寂し
き

たまさかに勤め口ありて働ける父人今宵早う寝め
り

二個買へしバット一個を父に贈る正月の夜の食し
いプレセントだ

雪明りたゞそのまゝに夜の更けて今宵すなはちよ
しと思へり

灯の流れ遠くあらざりその中に浮くともあらぬ雪
の降る見ゆ

あるまゝのものゝ力の氣配持つ吾を知りたる苦痛
なむぞや

留置場ナンセンス

松浪 三郎

警察の××を容れて留置場住ひを初めて此處に廿七日、得たる収獲は肋膜炎の再發、眼病、痔、憂鬱症と之だけだもつとも面白い事もないではなかつた。私は感ずるまゝ、に隨筆で書いて行こう。推敲も吟味もない拙言だ。

或時——留置場前の廊下をキョロつき乍ら匂ひ廻つてゐた一匹の仔猫が突然身を躍らして私の檻房に飛込んだので三晩抱いて寝てやつた。飯も割愛して與へ一日二回位は外へはうつてやつた。それは糞尿をやる機會を與へたのである。當初の頃は界限の人慣れした猫さのみ思つてゐた處、ではなくて捨てられた失業猫であつた。社會奉仕的に野

ない。猫は四日目の朝、使丁室の辨當箱に爪を立てた現行犯として捕へられたが、微罪放免となつて姿を消した。

或時——天神蛙が私の蒲團に忍び込んでゐた。これは鐵窓の破れ金網から入り來つたことが想像出來る。隣房の同志Aに蛙の這入つて來たことを聞かされるとそれは『歸る』といふ吉兆で今明中釋放の御沙汰があるのだらう。天神様のお使ひだよなんて與太つて自慰を満たしても見たが、蛙の事件以來既に廿日は過ぎたがまだかへる能はずだ。

或時——二十十日の前の日の様に記憶する、留置場の西窓から紫外線の強い夕陽が射込んで房内の白壁がオレンジ色に映えた頃

だ。漂然として客來、それは一匹のキリギリスである、鐵窓から私の頭上に、頭上から房壁に跳ねてとまつた。物倦く怠屈の遺場に困つてゐた私は仔細にキリ公の一舉手一投足を凝視してゐた。平和な呼吸が透き通るような草色の柔かい腹部を膨縮させてゐたが、何思ひけん横に逼ひ斜めによち登るような動作を數回やつて落着いた地點は一番暗影の濃い壁の隅である。こいつが浸々たる夜氣のペールに包まれた房内で体には似合はぬ高律音で啼き出した。寧ろ五月蠅い位であつた。翌る朝蚊帳を疊まうとする時、まちがつて殺めたことは氣の毒で堪らなかつた。留置場入來の珍客はざつとこん

な者だが常客となるとみんな×本家みたいな吸血魔許りだ。第一に蚊、それから蚤、虱、南京蟲、何れも負けず劣らず人血をすつて嫌な繁殖をやつてゐる（かどうかは知らぬ）もののようだ。留置場の一房は私一個の室のようだが、詳細な調査に依ると決してそうではない、凡ゆる生活の群れが走馬燈の如くに動いてゐるのだ。無數の蚊、殊に私の住ひは便所を隣りに控いてゐるので文字通り関の聲を擧げて私の体臭を嗅ぎつゝ迫つて來るには併口して仕舞ふ。讀書してゐると白晝公然なき聲立てすにすり寄つてくる奴がある。この種類の奴は体

に縋がついてゐて一見屈強悍猛であることがわかる。房内の白壁に晝間休息してゐる蚊を指の先でひねり潰すので點々たる赤い模様は彩られてゐる。この無數の血痕は私の鮮血であり私の血に依つて描かれた模様だと思ふと實に感慨深いものがある。次に蚤だ。私の住居が便所と隣り合つてゐること故に非常な陰濕だといふこと、そして住居には疊がない事などは蚤の生活に適應してゐる。これは天狗飛切り術を心得てゐる代物だから容易に捕へることが出來ない。科學者に言はせると、体の三百倍飛ぶのが普通だといふ。捕へようとするが吸血を終やしてシャク／＼たる餘裕で一飛びに三百

倍の高飛をアツサリやつて知らぬ顔の半兵衛だ。癪に障ることは人の血を既に糞にしておる上敷が奴の糞で臺なしにされてしまふ。それから南京虫だがこれは四回しか出沒しなかつた、二回目に奴の歯牙に懸つたのは陰莖だ、×××藥局からホーユ水の差入れを受けて頻りと患部の治療を怠らなかつたが偶々猛烈に痒いので掻きむしつてしまつた處、十日を経過するも容易に治らぬ。

蚊、ノミ、南京蟲、蛛蜘蛛等と凡ゆる劣等動物が私と雑居だ。而かも彼等が私の瘦せすぎな体から吸血して太鼓腹になつてゐるのだから癪に障ること筆舌の限りでない。彼等は檻房から自

在に出入する分に於て何者の束縛も受けない。我々は鐵窓越しに僅かな空を見出し、庭前の柿の實の色づきにせめて秋を感じ、朝の細長い射陽に血色の失せた面を向けて紫外線を求め樹間に懸つた沖天の秋月にオツな感傷氣分を味ふと言へば、詩人輩は一度この光景に接する機會が得たい等といやに眞面目な顔で言ふかも知れない。がそんな好事者があつたら代理を勤めて貰ひ度い。

×

告!

小社は第二輯を期して地方文壇の新人より短篇小説を募集す

發表に就いては出來得る限りの懸賞を附す勿論それは原稿用紙代にも充たぬものではあるが諸氏小社の微意を諒せられ奮つて投稿あれ

廿字詰廿行原稿紙十五枚以内とす

期日 二月廿日締切

送附 編輯部宛

純 一 譜

高 瀬 勝 男

不 歸 賦 福 得 道 佛 性

花・鳥・草・木・私にふれるものみんな美しく見た

去劫七歳、純一との交遊が親しさと、憎しみと、扶け合ひと、下蔑し合ひの不思議な心根をもちながら、何かにつけての友達としてきました。

或日、彼と雑談を叩きながら疲れても尙歩るき、夜過ぎの田舎道で、月を見たこともあつた。

風・雪・も一緒だつたし、私達程、ほろついた人達は少いことせう。

こんな時、無口な純一が非常に饒舌であつたり、饒舌な私が、馬鹿に口重であつたりした。

松本を語るに、一面どこかしら女性的なほにかみがあり、愉快に語れる男でなく寂しみの深い男だつた。

嗤ふ時の遠慮さと、ねち／＼した、純一が、實に繊細な感情のもつたのが常で、性格的に甚だ私と離れてはゐたが、お互の我儘は別に云々することなく、久しき間、激しき議論の後も會ふことを欠さなかつた。

私が書作に飽きた時の怠けさ、私が書作に悩んで居た時の焦心にも、相變らず、こよなき相手であつた。雑誌を出す様になつて種々と面倒な煩ひが次々に重つてからも、彼は欣んでこれらの障礙に當つてくれ、

家で原稿する折々には、淹き茶を喫することが好きだつた。良く、両親が私に語つた、だんまりやの彼ではあるが、戸外にい出て、宗教あり、藝術あり、シチマあり、この想の積載は私をひきつけ魅力に富みまたユーモアにも富んでゐた。熱心に讀んだ、熱心に書いた、熱心に歌つた、純一が、そして彼程創作を愛し、詩を愛し、純情多感な一面、思索的にも懷疑の目をはなさなかつた想人の彼が、熟練した均度と割出の数字的知識よりも、圖面を引くより、どんなに精神的潤色を藝術に求めてゐたか

結局彼は死んで行つた、私は贅言を費やしたくない。

今、純一逝いて、秋怨、生死不定を想ふ。

從兄弟に當る石川武夫さんも書くことではしうから私は以上を書きたくない

一九三〇 九 二五夜記

蟬 燥 記

.....松本七郎君のこと.....

石 川 武 夫

松本七郎君と私とはい、同志であつたよく一緒に遊んだ幼少の頃の記憶もある私より一つ年下の君は、學校の成績がいつもよかつた。私はそれを羨み、また自身に恥かしがつた。

私が尋常三四年の頃、君の一家は平を引き拂つて東京に移つた。

私の中學時代、君は東京府下の世田ヶ谷の家から電機學校へ通つてゐた。幾何や三角を勉強するペンで、小説や詩のやうなものを書いて、騰寫版刷りの雑誌を出してゐた。活動寫眞も好きであつた。

東京の生活が十年位續いた。

震災後、君の一家は生長した君を連れて再び平へ居住した。

君は洋服を着、辨當を下げて、毎日綴の炭礦へ通つた。

體て、病魔が君を襲ひ、藥師に親しむやうになつた。一年位の間、病氣は一進一退した。今年の春三月、豊間の回春園に行き、五ヶ月余りを海濱で過して、遂に亡くなつた。

『七ちゃん、よく日記を書いた』と言ふ。
無口な君だった。

炭礦へ通つてゐた時代、そして病床期、君は社會を、環境を、あの特有の大きな眼で直視した。戦つた。批判した。君自身に、君自身を。

君はよく書いた。同人雜誌を出したりしたことある。小説、戯曲、詩、その他論説等。また『光と影』社といふのを組織して、映畫の方面にも活動した。よく書いた君は、また多く讀んだ。別けて、考古學、哲學、生理學、隨筆等に興味を持つてゐた。

三

家人その他に無口な君も、私達とはよく談笑した。私達は君の熱情に感じ、君の眞面目に敬服し、また君の神經質を笑つたりした。瘦せて、身長が高く、弱さふに見えた君は、氣丈で、健談家で、足が達者で、今までに病氣らしい病氣をしたことは無かつた。

口笛が得意であつた。

私は思ひ出す『瘦弱鶴の如き』君を。

四

三野混沌氏は君を言ふ、『これからの人だった』と。

また言ふ、『死期を前にした君の氣持は、たしかにとつしりしたものに違ひなかつた』と。

ほんたうにさふだつた。病院生活の後半あたりの君は、靜かな、山のやうに落ちついた氣持を持つたであらう。その氣持から、新しく出發すべき筈であつた君！

五

秋になつたら、私は豊間の病院へ君を訪れようと思つてゐた。

もう秋になつた、つくつくばうしが頻りに鳴く。

虫の音

秋風

それから、まるくなる

月――

今度の追悼會あたりに出版される君の遺稿集の整理を、この頃の私はしてゐるだが、それすらが重荷になり勝ちな程、怠惰に馴れた私だ。こんなことで一体私はどうするのであらう。

(九月十日稿)

遺稿

私に望遠鏡

想ひ出はわれらのもつ最も美しい虹である

松本純一

× 小さな冒険

今の藤田女學校とこに幼稚園があつた頃、懐かしいカナリ先生の雛ッ子であつた私と従兄のたけちやんはその日の幼稚園歸りをそのまゝ、言合した様に城山へ出掛けた。

城山の崖近くに、あつたかく櫻の花が咲いてゐた、私達は丁度石油タンクのある真上あたりで緑色のまぶしい草の上に坐つて、覗く様に街の姿を眺めてゐた。

私は何氣なくそばの櫻の木に太くからみついた蔦をたぐつてはそれにまたがり乍ら、

「たけちやん、ここんどこへぶら下つてみつかんな」と崖下をあこでしやくつて見せた。

たけちやんはたゞ笑つてゐた。

私は力強く蔦を張り乍ら後へその小さなからだをもたせた——同時にするするつと足もどがすべつてあつと言ふ間にほんとうに崖下へ全身がぶらさがつて了つた。

私は夢中でしつかりと蔦を握りしめ、兩足をいくどか、もがいた、そのうちにたけちやんの顔が崖ぎわに半分はご出て、ひつこんだと思つたら大人の聲がまじつて、やがて蔦諸共に私は引上げられた

たけちやんに道々——うちへいつても言はないから——となだめられ乍らも、熱つばい掌が蔦の肌をむいてゐたことを鋭く感じてはぞつと首筋を締めない譯にはゆかなかつた。

× 馬鹿をみた正義

一丁目裏の川岸通り、丁度私の家の裏口のところに女髪結がゐた、三十位の年増でヤモメ暮し、一寸した酒亂性がいつも近所を騒がせてゐた。

或る日、裏口を通り抜け機とすると店先にいつばいの人だかりだ、覗いてみると可憐そうに吉田あんなが頻りと何か酒亂女に罵られてゐるのだ、左の背を崩して若き吉田あんなは泣きじやくつてゐるのだ。

この情景は小さな秀の正義心を喚起して、いきなり人混みを割つて居間へあがるなり女髪結の横ッ面を氣持よく擲つた、同時にワツといふ大人げない悲鳴に混つて、こんどは手放しに酒亂が泣き出したのだ、するどどうであらう、今までなきじやくつてゐた吉田あんなは彼女の傍にはひよつて、おばさん、おばさんと妙に黄色い聲を張り上げてなだめだしたぢやないか。

私は吉田あんなの白いまなこでにらみつけられ乍ら、持餘した正義をそのまゝ放り出して臺所からはだしでうちの庭へかけ込んだ。

× 誤られた抱擁

九ツの時だつた、私の従姉のみつちやんと向ひ側にあつた綿屋へ遊びにいった。
綿屋にはみつちやんと同級の女の子がゐた。

店からあがつて奥座敷へはいらうとしたら、綿屋の子が——一寸まつて——といふので梯子段のところで待つことにした。

と、みつちゃんか、かくれてびつくりさせやうと悪戯氣を出したので、私も同意したが見た所、かくれる所がない、仕方がないので梯子段の裏側に高く積まれた綿包の間を割つて、無理に小さなからだをもぐりこませた。

そして息を殺しては、思ひ出した様に顔見合せていつとしてゐた。

それまではよかつたが、突然、店先の方から新しい綿包が積みかさねられたので、息づまる様にふたりのからだを押つけられて了つた。驚いて今更、聲も出されず、静かに、ある限りの力で自分たちの間隔をあげ様としたが、もがくほど、どうにもならなかつた、軽く諦めてはてつた額をすり合せ乍ら、人の足音をまつてゐた。

この時、三階から綿屋の子の母親が下りてきて不圖、この神のみ知り給ふ小さなもの、姿態を誤まられて發見され、小さくなつて引き出されるまで、かの母親の顔は、いやしみていつぱいだつた。

× 竹藪の鬼婆

箭の出る頃だつた

私は兄と相談して八幡社の前にある竹藪へ箭を堀りに出掛けた。

今は見かけもないが、そのころは立派な竹藪で、角のどこに破ら家が建つてゐた。

私たちはそつとグラウンドの方から藪中に這り込み、美事な箭を二個堀り出した途端、ガラガラと戸の軌る音がしたので、慌てて道路へ飛び出した。

見れば、一人の老婆がごま藍の髪をふり亂して、胸はもうくもはだけてあばらばねが鋭く突きいで片手に鎌を握つた物凄い形相だつた。

『ごこの餓鬼めらだ、箭をぬすみやがつて——』

鬼婆は怒鳴り乍ら私たちに迫つてきた。

兄は素早く引つてきた自轉車にその丸い軀を乗せてみるまに裁判所の方へかくれて了つた。

わたしは獨りになつたことに氣がつくと、無我夢中で八幡社の樓門を一周し、老婆のゼイゼイ聲を張上げるとおそろしさをうしろに、はづむ様にあの急な鼠坂を駆けおりた。

勿論、箭は二個とも兄の手に無事だつた。

一九三〇、三

二日十六日

日 記

今日、八幡社の前を歩くと、竹藪の奥に破れた家が建つてゐた。昔は立派な竹藪で、角のどこに破ら家が建つてゐた。今は見かけもないが、そのころは立派な竹藪で、角のどこに破ら家が建つてゐた。私たちはそつとグラウンドの方から藪中に這り込み、美事な箭を二個堀り出した途端、ガラガラと戸の軌る音がしたので、慌てて道路へ飛び出した。

日誌抄

二月十六日

七時一寸すぎに起きた、成程、冷なびえる、近頃特に感じた朝の觸手である思ひ出したまへんをどつて大阪のキヲ姉へ便りを書く『親はしき姉上』と三聯書綴つた氣持が病後からきた煩はしき、そして晴れやかなセンチメントのいみじきものでないことを自負する。十一時春ちゃんきて『キヲ句』をおいてゆく、彼として海苔巻きの餅を喰べいつたことなんか一興も二興もある科さである。親父、なんさか（龍上どか言つた）観音の掛物をもつてきて至極勿体がる、これからあれをうら打ちして信仰するんだと見れば間違ひない。どうも今日の体温は變調だ、にんにくを喰べたせいではあるまいか。

三月十九日

曇天

兒童藝術研究會のために『警城の新興運動近事』と題して原稿三枚、書きすぐ新聞社へ出す、晝から昇さんと春ちゃんくる、昇さんの口語歌集『噴日集』の跋文を書いて呉れど原稿を持つてくる、仲々面白いのがある。

口語歌は或る一面自由な韻却詞をもつてゐるから質素的寫實性に對する危惧があるやうに思へる……殊に技巧の格配に就いてまた然りだ、榮ちゃん來ておたけおばさん

こんなこと
自ら慰むる
構成的な
或るイリュ
ワシヨシ
手段が自ら
を演ずるも
のであるこ
さをあの現
實的力のな
いプロバ
から深く認
識すること
ができた。
今自分は絶
對的還元を
試みなければ
ならぬ。

A. 37...4
B. 37...1
C. 37...6

管野キツ

の告別式當時の話しをする。風、雨にかはつて眼の邊りこそ水々しい、よる、思ひ出すまゝに筆をとつて『噴日集』の跋文を書く。

三月二十一日

讀んで見ると「モンテ・クリスト伯」は非常に面白い、エドモン・ダンテスに對するメルセデス……即ちメルセル夫人の愛惜がトレモロの美しさを語つてゐるやうだ世の中に於ける『復讐』といふものがこんなにせいたくで聰明であつたなら愉快に相違ないと思ふ。晝頃、武ちゃん一すきて島田に用があるんだがとすぐ退場、二時前後勝ちゃんきて會員券を都合して呉れど置いてゆく。夕方珍らしく三野さんくる、病人はよろしく晝行燈主義を採るべしと主張し病人が病氣を癒すことに専心する事が生活とすべき大きな習性でなければならぬと説いて歸へる。春宵の月しろにためらいだ庭先を便所の窓から見えた。

五月六日

晴れる

出掛けるのも臆苦なので藤椅子を庭に持ち出して日向ぼっこで『新青年』を読む、江戸川亂歩の『押繪と旅する男』近頃彼のデレクタンな氣分から救つて呉れた佳作。岡田時彦の『偽眼のマドンナ』もせんさいを極めた描寫で面白く讀めた……ちやうど『足に觸つた女』でマツト・ムウア振りを見せた、あんな調子がふんだんに産されてある晝前、勝ちゃんのおやちさんがきて例の訴訟問題で一丁目の確意を得んがために訪れ

A. 36...6
B. 37...2
C. 37...2

こんなこと
兒童の情懷
問題に等閑
に閉ぢられ
ない兒童の
自に於て
今日に於て
認識するに
ける文化生
活への實生
の兒童自身
の本質力と
してその世
界をアトラ
クチングさ
れど思ふな
いと思ふな

A. 36...6
B. 36...9
C. 37...2

管野キツ

便通あり
A. 36...4
B. 39...6
C. 36...7

この日皇后
陛下には三
度目の内親
王殿下御
誕生遊ばさ
れた。

來信
松村 清
磐城新聞社

た。二時頃、春ちゃんきていづこも同じ九・五ミリの映畫で大賑ひ……なほ夕食すん
てから春ちゃんと昇さんを訪ねて映畫研究所創立に就いての宣言書を起草する——十
時すぎ歸る。

九月三十日

サラサラといふ雨がまつたく冬の仕度である、雨に閉ざされ、憂々と楽しむ心なく
また言葉のひとつひとつをかけたあたる心もなく、それでも筆をとらせて『木馬にの
る男』を二枚半ほど書かしたのはせめての思ひやりらしく——世田ヶ谷の八幡さまを
突切たところにある水門の傍らで清らかな戀を語つた思ひ出がしつと浮んでくる
打消そうとあせればきつと春江ちゃんのみめつけるような寂しそうな顔が大きく迫つ
てくる——今年お嫁に行くといつたがどうしたかしら。夕方、武ちゃんきてよる春
ちゃん来るから待つてくれと傳へにきて呉れる、七時頃春ちゃん星あかり冷たい空を
仰いで昇さんを訪ねる、あした昔狩りに行かないかと昇さん誘ふ、歸宅九時過ぎ。

十一月五日

なんと健やかに育ち切つた秋深い日和だらう、思ひきり兩足を投げ出してうつとど
として了ふぢやないか、こんなにごつさり惜げもなくさあ ささし出したひとつひ
ごつの光りに何んにも考へられない幸福をみちみちと覺へる……
一丁目の法事で母が居ないので僕、久しぶりで留守居役、イワノフの『装甲列車』を
讀む、野良犬の様な嗅覺だけでたゞしく、その割りに粗雑なタッチでバルチザン

來信
松村 清

への明日性を描いてゐる、殊にアメリカの兵士にプロレタリアといはしめてざらざら
した感激をパンと煙草に喰ひついてゐるエルシーニンの下らない表情（ここんとこち
や意識の分配といふんだらう）……詰らない作品
『シャルル・ルイ・フィリップの肖像畫』といふ小論を新聞社へ送る、よる熊さん
とこで子供らとイロハ歌留多をとつて一騒ぎしてから來合せた春ちゃんレコードを
持つて鼠坂へ行く、やつぱり歸宅は十二時前後になつて了つた……。

十二月一日

ふり續けて了つた雨の朝だつた、カナリヤに餌をはんでゐたら清ちゃんと運平さん
がわざわざ誘ひにきて呉れた——で一緒に出掛ける、雨が小歌みになつたがふきつけ
る風に足もとを拂はれつ、鎌田山を約半町、羽黒の湯にひたる、湯宿一番のいゝ室に
納つてしみじみと寛げる氣持でそこらの壁に綴られた歌書をよむ。湯にはいつたが
湯槽小さく殆んど片方を使用せぬ様では男女混浴が完全に黙許されてゐるらしい、生
温く淡白色の湯だがあがるとばうとする程からだ温つてゐるんだ、聯珠にもあきチ
クオンキにも手が出す柄になく俳諧趣味と短歌情緒を味ふ——山茶花を訪ねていでゆ
見知りけり——愉快な一日を五時近くまで遊んで歸路清ちゃんの家により夕食をすま
し八時すぎ北朝風景を一寸覗いてから梅の湯で十時頃だつたか解散——今日の不參者
（熊さん——おうさん——春ちゃん）

十二月二十日

來信
松村 清

やはり水雨でかなり氣温が低下した、そのせいでもあるまいが惡寒が時々見舞ふ。咳が稍や樂になつたが咳すればやはり心配になる兩親を思ふとかへつてくるしい、なんとかして早く癒したい。晝から二葉へいつて清ちやんの晝休みを利用して昇さんと一緒に訪ねる、久し振りで會ふ、石油熱器で室をあためてゐる、露沾や清徳の話をしてゐたら春ちやんくる、これも久し振りだ。すぐ基がはじまる、そこへ武ちやんがくる、久し振りに四人が集つた。三時頃自分だけ辭去して病院に藥貰ひに行く、夕食は牛鍋だつたがあまりにんじんが多すぎたので變な味合だつた。あれのような風雨を二葉から清ちやんをまち鎌田へゆく、あゝから運平さんも一緒になる十二時近くまで『一九三〇年』の原稿の中に雜談を費し歸へる。

一月 卅 日 晴 天

正月元旦なり、舊曆のことなり

どこかに女角力ありてか、やぐら太鼓うるさし、晝近く、佐藤君來り、約束の原稿二枚渡せり、これより羽黒温泉につごふとで急ぎゆきたり、よる相變らず發熱す、此の病める物臭にかへる懷なしと自思するのみ。

二月 四 日 晴 天

發信 西脇、佐藤、

立春も今日になり。故に句あり、節句も立春にすぐ一夜哉
よる、なぐさなつた、どうこのとりは——トントコトトコと言へる七草の舊宣式な

るも今はなく滅びゆくものひとつと數ふべし。

二月 八 日

容体の一部に輕微なる異狀あり、右背に虫の匂ふに似たる感觸あり、右肺の(幼稚なる肺炎の活動位置)痛み變化し從來の痛みは或る部分に凝せりと覺ゆ。

二月 十五 日 晴 天

けさ、兄榮一來りわれの靜養地を決すべき話あり、高久氏も濱へゆけば藥の要なしとまで説けり、われ、未だ好まざるもよきところあればの程度を話しおけり。

二月 二十六 日 曇 天

晝過ぎ兄來りサンドウ井ツチを土産せり、ひなにはまれなる味を持てり、いづこかと言へばイツギ・サロンの由、バイアツブルの乾あんずを汁漬せるはうまし、ごもくストブを攝る、今日の食慾の素晴らしきをまづ舌うらにきくべし。

三月 一 日

原稿を清書せしが流石に疲勞多し、父母ともあなじる眼をたまたま向けり。最近島田君見えす、如何せらるや……。

いろ／＼のこと

編輯子

かつて文藝誌一九三〇年誌が発刊されてゐた。同人誌で、僕もその末席にはびこつて大きな面をしてゐた。同時にこの雑誌を大きなものに仕上げ様と皆懸命に力を注いでゐた。不幸にしてこの同人の皆んなに大きな魔手が迫つて来た。全く一寸先暗の世の中です………。先づ編輯の責を負つてゐた相場が病氣療養中に突然勤務先の某社より事業不振によるの最もらしい××××の下に減首された。續いて僕だ。合法的勞資協定の美全ふす能はず感情のもつれから長年勤めて居た二葉印刷所を退く、今日尙遺憾に思はぬでもない。續いて鈴木が事業短縮の下にやはり失業の街道に——斯うして一九三〇年誌の同人の過半数は矢つぎ早やにはつた／＼と切り取られて了つた。何だか考へると情けなくなる先におかしささみあけてきて莫迦々々しい感じになる。

手も足も出なくなつた僕達はわづかに残された素ッ裸の身体をどうでもなれと思ふ様に炎ひる様な夏を海邊で轉げ廻つた。方々から送られた原稿がアクビをして居るだらうと思ふと僕の神経は妙にするぐくなる。わけのわからなくなる様な日が随分續いた時、南町の大和田印刷所主の犠牲的な招ぎに依り漸く就職………。

自分の氣が漸次落付き初めた八月の十九日だつたと思ふ、日曜の日だつた、四倉の濱に行つた時恰度相場が病氣、轉地療養の意味で行つて居るのと偶然會つた。種々其後のことを語り合つて居る内たま／＼七ちゃん(松本純一君)のことに就いて語り出した。私は言つた。

此前の手紙にも書いて寄こしたんだが、八月の末か九月頃には歸られると言つてゐるんだから既う随分いゝんだと思ふ、兎に角この次の日曜に亦行つて見やうと思つてゐるんだ」と相場はそれを聞えて喜んで居た。

またを約して相場と別れ、海に這入らうと思つて歩み出した時、實に其時だつた、向ふに石川、川田の二君が居たので、思はず歩みを運んだ。突然、昇さんが(川田)七ちゃんさこの葬禮に行くの』とさかれた。

何？七ちゃんどころ。

瞬間僕は間誤つて了つた、何人だかわけがわからないので

誰れ、誰れがなくなつたの、かあさんですか？

えゝ！誰れ、おかあさん！君は未だ知らないの

とさた

僕は其刹那、ざざんと胸が鳴のを覺えた。若しや、七ちゃん？、が直ぐにその心を打ち消して、そんなことはないこで叫んだ。

ちやあ、一体誰なの？『僕の言葉が切れないうちに

『七ちゃんだよ………』

えゝ——僕の血液が急激な活動を始めた。同時に僕の頭は、大きな石にでも壓せられる様に切迫

した意識の確立性を失つて危く倒れ様とした。偽！偽！偽！僕はこの現實の標準をも否定しやうとした。

併し否定しながらも、水に飢れた者が水を求むる時の様に、ヒカラびた喉の奥から其次に聞かねばならぬことをいら／＼しい感情で聞かうと焦つた併し何事も事實だつた。其拾分前には僕と相場が歸る日迄喜こびのうちに話したのも事實である如く、今二君から話された死も事實だつた。

自分が七ちゃんさ死を語り合つた昔、おそらく僕が先に死ぬであらうことを思つた、七ちゃんも僕の死を認めた(これは眞實です)

夕方四ツ倉の街を流車に乗るべく歩いてゐる僕は、唯一枚の濡れた海水着を持つにさへ苦しく、腰にぶら下げながら、七ちゃんに對しての想ひ出を頭一杯に浮かして歸つた。

家に歸つてから、送られてあつた原稿を出して再讀々々終ひには、この死と云ふ事實をさい亦否定してしまつた。

夜、田町の七ちゃんの家を訪れる迄は……
 やがて夏が行き、秋が過ぎ、冬が訪れた今日、
 僕の心は、七ちゃんは生きて居て僕の前に、ヒョ
 ツコリと出て来るやうな気がしてなりません。
 色々な問題が重なるご自分がなさねばならぬこ
 ともおくれ勝ちに終る。

七ちゃんの死後僕は直ちに一九三〇年誌を再刊
 さそうと思つて、高瀬、石川の兩君に希ひ前頁記
 載の原稿を送つて貰つた。併し突然それも一時思
 ひ止まらなければならぬ様なことになつた。以
 前からいけなかつた頭痛がその間ぎわになつて到
 頭本物になつて了つたからである。

今日稍や全快にちかい結果を得、心がかりであ
 る本誌の發行を見るに至つたことを喜ぶ。

幸ひに諸氏の御宥恕を得んことを附記す。

何處からか春らしい香ひが通つて来る日、遠く
 の山に、は班らに殘雪が散ばつて見える。やがて
 すつかり冬が衣をぬいで了う頃、サイレンがまた
 皆んなの下に勇ましく傳わつて行くであらう。

◆ 約 束 ◆

- 一、本誌は隔月に發刊す
- 二、會員は文藝誌發行支持費として金拾圓を原稿と同
 時に納入のこと
- 三、原稿は可成一篇を望む
 但し和歌 俳句は數種も可
- 四、内容 詩 和歌 俳句 小説 戯曲 評論 隨筆 感懷等々
- 五、宛名 平塚市鎌田町 『サイレン社』編輯部宛
- 六、締切隔月二十日限り 住所姓名を明記のこと
- 七、編輯は編輯部に一任されたし

昭和六年一月三十一日印刷納本
 昭和六年二月五日發行

〔頒價金拾錢〕

編輯人 佐藤三平
 發行所 大和田印刷所
 印刷所 大和田印刷所
 發行所 サイレン社

神秘的家傳目藥

一度び試し其効力を知られたし

山快眼水

特約發賣元

西村屋藥局

清々しい四季の花

お好みなら

いつでも持參致しませう

坂本植木店

平町大町 (元公會堂前)

御存じですか？

皆様から
 素敵な識辭をいただいてゐる

酒井印刷所

平町鍛冶町

三 佐藤材木店

佐藤三平

内郷村小島字新町

あなたの方の

マルトモ書店

電話二三四番

平
仲
町

二葉印刷所

電話一九三番

牛久
子婦人
洋服

製造販賣店

平町四町

平
南
町

大和田印刷所

電話四六番

悼松本純一君

高久晩霞

荒磯べに寄るうたかたやたまきはる君が命は失せにけるかも
口重き君なりしかご相對へばこそさらならぬ笑顔に語りし



影面の氏郎七本松 最